中国と日本の色絵磁器

中国

青花

青花皇龍文大皿
京都国立博物館
明時代　景德鎮窯　15世紀前半
直径:44.5cm

※解説
精良な素地、良質のコバルト顔料が用いられ、濃く深い発色の文様がわずかに青みをもった白地に映えて、爽やかな効果を生んでいる。15世紀前半の景德鎮窯で焼かれた青花大皿である。元時代の青花と比べると文様の構成に簡略が進み、筆の運びもリズミカルで、優美な表現になっている。

天啓赤絵

五彩鳳凰文皿
京都国立博物館
明時代　景德鎮窯　17世紀前半
直径:18.8cm

※解説
絵付けのタッチや色使いが古九谷と似ている中国明末の色絵。古染付と同様に、景德鎮民窯でおもに日本向けに生産されたこの手の色絵磁器を天啓赤絵という。
（解説出典:青柳慶介、荒川正明『古伊万里　磁器のパラダイス』）

呉須赤絵

色絵牡丹図子文大皿
京都国立博物館
明時代　17世紀前半
直径:38.5cm

※解説
明末に福建省で焼かれた量産の色絵磁器を呉須赤絵と呼ぶ。この手の大皿は前田家ほか大名家の江戸屋敷跡から出土しており、宴の器として使われたと思われる。

萬層赤絵

五彩 牡丹文 盤（「大明萬層年製」銘）
大阪市立東洋陶磁美術館
明時代　萬層（1573～1620）
直径:30.5cm

※解説
素花に上絵付けを併用する技法は、既に宣德期には成立していたことが近年明らかになった。
その他の色時代にも作例はあるが、特に造作しやすい比較的万曆窯で焼ける。水墨ぜん、
他反りの盤の見込みに牡丹文を描き内部に石榴や蓮枝などの瑞祥（ずいしょう）を
外側面に宝相華（ほうそうげ）唐草文を配している。文様構成としては、明初以来青花、五彩にも継続して見られるものであるが、その表現のしかたは従来のものと全く異なっており、繁縟（はんじょく）ともいえる描法である。（『大明萬層年製』銘

河南三彩

大分市歴史資料館
明時代　16世紀後半
直径:29.0cm

※解説
明時代後期の中国華南地方で焼かれた八稜花の口縁をもつ器折れの三彩皿で、見込みに魚や手長海老、水草などが印刷されている。素朴な太線描は全面に施釉され、独特な雰囲気をかもし出している。これと同類の皿が、大分市の中世大友府内町跡から出土している。

黄地緑彩磁器

黄地青花 折枝花卉文 盤
大阪市立東洋陶磁美術館
明時代　正德（1506～1521）
直径:29.5cm

※解説
青花の釉表に文様部分を残して黄釉を塗り、再度低火度で焼成したものである。この技法は宣德年間に始まり、以後各窯の作例が知られる。濃厚な黄地に鉄色が眩やかに映え、強烈な個性の一群である。盤の見込み中央には石榴の花を大きく描き、内側面に梅、桜桃、蓋様、桃の瑞果（ずいか）を、外側面に宝相華（ほうそうげ）文を配している。文様も、宣德年間以降、青花、瑠璃釉、釉裏などさまざまな技法で繰り返し描かれたものである。
「大明正德年製」銘

日本

古九谷様式

染付

九州国立博物館
江戸時代　17世紀
直径:48.8cm

※解説
本作品は典型的な初期伊万里大鉢であり、口縁を鎬状に仕上げ、内面底部が広く、高台を小さく削り出し、総体に薄壁を厚く軽量成形する。全面に青味を帯びた透明釉を施けるが、高台付近には施釉時の手跡を残し、生掛け焼成であったことが知られる。内面には染付により手慣れた筆致で草花文を描き、おおらかな作行を示す。

五彩手

伊万里(古九谷様式)色絵 牡丹宝瓶文大皿
戸栗美術館
江戸時代　17世紀中頃
直径:35.3cm

※解説
五彩手。濃い色調で中国絵画のような文様を描く。

五彩手（百花手）

伊万里(古九谷様式)色絵 山水花鳥文 大皿
佐賀県立九州陶磁文化館
江戸時代(1640～50年代)
直径:30.7cm

※解説
古九谷大皿の意匠は五彩手と青手に大別できる。五彩手の特徴は、五色の絵具を使い器面に余白があること、見込に円や丸角の窓を取るものが多いことなどだが、この皿のように見込の周囲にびっしりと花唐草を描いた器を、とくに百花手と呼ぶ。
（解説出典:青柳慶介、荒川正明『古伊万里　磁器のパラダイス』）

青手

伊万里・古九谷様式色絵草花文絵花大皿
京都国立博物館
江戸時代　17世紀
直径:34.7cm

※解説
五彩手・青手・南京手に作風が大別される伊万里・古九谷様式の中で、最も豊かな表情を誇るのが青手である。この大皿は見込に奔放な筆致で草花文を描き、見込から側面にかけて地を花文で埋め、青釉・緑釉で塗り、線状にした輪郭の口縁も絵柄に連動させ、抜群の技量を発揮する、抜よりも自在奔放な意匠表現に重点を置いた青手を代表する作品である。大河内正敏氏の寄贈品。

五彩手（楠木谷窯）

色絵花鳥文絵花皿
出光美術館
江戸時代(1680年代)
直径:22.6cm

※解説
山辺田窯に続いて色絵磁器を焼き始めた楠木谷窯の製品。山辺田は大皿中心、楠木谷は中小の皿といった器種の違いとともに、楠木谷では素焼を行うなど技術の差もあり以後の有田の窯は楠木谷系の技術を受け継いでゆく。高台内に「天禧元年」（1653年）の銘がある。
（解説出典:青柳慶介、荒川正明『古伊万里　磁器のパラダイス』）

柿右衛門様式

伊万里（柿右衛門様式）色絵花鳥文絵花皿
戸栗美術館
江戸時代(17世紀後半)
直径:22.0cm

※解説
絵花部の鳥の内面金彩を従って、二羽の鳥と秋竹樹を描く。秋竹樹は、もともと中国で「鳥獣三友」という今の頃さに値える装飾としての嗜好品であったが、日本において陶器を焼す窯様に高名した大皿である。別しゆと呼ばれる白磁を背景に、上絵の赤・青・緑・黄色が上品に映えている。

山辺田窯系（有田西部地区）

楠木谷窯

参考（山辺田窯製品）

染付山水文大皿
佐賀県立九州陶磁文化館
江戸時代(1650～40年代)
山辺田窯
直径:44.2cm

山辺田窯出土陶片
戸栗美術館

参考（山辺田窯製品）

青手草花文大皿（山辺田遺跡出土）

出土色絵陶片と類似する伝世品
（ジャカルタ国立博物館蔵:『陶を焼った匠達のやきもの展』九州陶磁文化館1990より転載）

古九谷様式の中皿は、楠木谷窯でも焼かれていた。